

2019年9月29日

## 福音書からのメッセージ

ある金持ちがいた。いつも紫の衣や柔らかい麻布を着て、毎日ぜいたくに遊び暮らしていた。（ルカによる福音書16章19節）

ある金持ちの門の前に、ラザロというできものだらけの貧しい人が横たわっていました。そのラザロが死に、そして金持ちも死んだ。それが今日の物語です。

今日の話は、ファリサイ派の人に対して語られたと思われます。彼らは、このラザロと金持ちの話聞いて、どう感じたのでしょうか。きっとファリサイ派の人は、この話を聞いても、ピンとこなかったと思います。それがどうしたという感じです。金持ちがぜいたくに遊び暮らして、一体何が悪いのか。というのも、金持ちというのは祝福された証だからです。神さまがその人に目を掛けたから、その人の元に富が与えられたのだというのが、この当時の一般的な考え方でした。

さらに言うと、ラザロのような男、できものだらけの貧しい人は、どう思われていたのか。彼は神さまの罰を受けていると思われていたのです。神さまの怒りが、その人を貧しくし、できものだらけの身体にし、門の前で横たわるしかない状態にしたというのです。

ではわたしたちは、この話を聞いて何を感じるでしょうか。物理的な門だけではなく、わたしたちの心の門の外を、たくさん人が行き交います。もしわたしたちが、その人のことはおろか、そこに人がいることすら気づかないのなら、この金持ちの話聞いて「ひどい人だなあ」なんて悠長なことは言っておられないのだと思います。門の内と外。自分たちに祝福が与えられていると思っていた人たちは、その垣根を越えて、境界線を越えて、交わることはしなかった。今、自分たちのそばに神さま



がいてくれる。だから大丈夫。それでいい。

そしてこのままでいいと思っていた人たちは、思い違いをしていたことに気づかされるのです。神さまの

祝福は、離れて行く。あえて金持ちと言わず、「このままでいいと思っていた人たちは」、と言いました。それは何故か。イエス様は今ここにいるわたしたち一人一人にも語り掛けておられるからです。

ラザロという名前には、意味があります。それは、「神は助ける」という意味です。わたしたちも、もともとラザロだったはず。門の前で「食卓から落ちるもので腹を満たしたいものだ」と思っていたこと、門が開いて招かれたこと、神さまが共にいてくださるといふ実感を得たこと。しかしそれが当たり前になってしまい、祝福された者として、金持ちとして、次のラザロが現れたときに門を「パシヤン」と閉めてしまう。そのような姿が、わたしたちの中にはないでしょうか。

わたしたちの門の外には、様々な人たちがいます。わたしたちは神さまから助けられた者として、そこに目を向けていきたい。その人たちと共に歩んでいきたい。

それがイエス様の求めておられることなのではないでしょうか。

### 桃山基督教会

〒612-8039

京都市伏見区御香宮門前町 184

TEL/Fax 075-611-2790

メール momoyama.kyoto@nssk.org

<教会ホームページ>

<http://momoyama.hannari.com/>